

第24回 ACEFスタディーツアー

Bangladesh 寺子屋訪問



2003年3月1日(土)~9日(日)

<メンバー紹介！！>



・青短の先生であり、大リーガーの吉井
 似のダンディーな黒岩先生。一見クール
 っぽいけど、のりちゃんに激しいツッコミを
 したり、実は辛口な人。シェアリングでの
 通訳姿はかっこすぎ！（向かって左か
 ら二番目）

・ともこさん（トモジャ）は、とてもしっかり
 した人で、姉御肌の方です。本人いわく、昔
 のともこさんは今とは違ったみたいです。
 この変化が、人間的な深みを生んでいる
 んでしょうね。子供好きというより、子供を
 愛している人です。（向かって一番右）

・さやかはスラーとした長身の人。前橋
 の出身。メルボルンにホームステイし
 た国際派。華のアオタン生です。短歌
 をたしなむ芸術肌。短歌・俳句をシェア
 ーしようと提案、全員に頭をひねらせ、
 選考会でキベ・リーダーをのけぞらせ
 た。（向かって一番左）

・有華は周りに気配りができて思いや
 りがあるし、ちゃんと自分を持ってす
 ごい努力家。他人の事も自分の事の
 ように感じる有華だから時に涙する事
 もあるけどあなたの素敵な笑顔はみ
 んなを癒します。（向かって一番右）



・辻沙代子さんはバングラデシュの子ども
 同様、陽気な笑顔の人です。ネトロコナで
 ダウンした時以外はいつも笑っていまし
 た。この4月 JR に就職し、蒲田駅に配属
 されました。彼女ならきっとオシュビダナ
 イでしょう。（向かって左）

・タフでボケボケでマイペースな真美に、
 メンバーはいつもハラハラドキドキ。なに
 やら子供のように扱われていた真美だっ
 たけれど、シェアリングでの発言や、サヨ
 を気遣う凛とした表情は、もう立派な大人
 のれでいーだったね☆（向かって右）

アジアキリスト教教育基金

The Asia Christian Education Fund (ACEF) とは

1971 年に独立したバングラデシュはアジアの発展途上国の 1 つですが現在、国を挙げての新しい国造りに励んでいます。しかし、識字率は未だ低く、政府の統計においても 49% です。新しい国造りに「教育」が欠かせないものであることは、言うまでもありません。

明治初期、アメリカからの宣教師が、日本の教育（特に女子教育）を始め日本の近代化に大きく貢献したように、今、バングラデシュで最も必要なことは初等（基礎）教育です。

1990 年 5 月ミナ・マラカール女史は、バングラデシュの首都ダッカ郊外において、初等教育に取り組むキリスト教系 NGO「サンフラワー教育計画＝SEP（現BDP）」を創立しました。このマラカール女史よりの呼びかけに応じて、アジアキリスト教教育基金（ACEF＝エイセフ）は、バングラデシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と 1990 年 10 月に発足しました。

* 7 歳以上で約 49%（男性が約 55%、女性が約 43%）。ただし、地域差・男女差はかなりあり、ジャマルプールは、15 歳以上でも約 38% 足らず（バングラの中でもかなり低い）。それに比べてダッカは 79% という統計。（BBS: Bangladesh Bureau of Statistics 調べ 1998 年現在）

（ACEF ホームページより <http://www.bluerain.fm/acef/> ）

<BDPスタッフのページ>

ツアー中、BDPのスタッフの方々は、我々のために申し訳ないぐらい、奔走して下さいました。感謝の気持ちをこめて、お世話になった方々のお名前と、若干の紹介を掲載させていただきます。なお、紙幅の関係上、そのすべてのお名前を載せることはできませんが、ここで紹介した方々以外にも非常にたくさんの方々にお世話になりました。重ねて、感謝をしたいと思います。

- ☆ アリさん - メンバーの身の回りの世話などをしてくれたナイナイの岡村似のアリさん。照れ屋だけど、写真と一緒に入ってと頼むと、急いで髪の毛をくしでとかしたりなんかしてチャメつけたっぶりな人でした。
- ☆ アルバートさん - BDP の責任者。穏やかな笑みを浮かべて話す姿が印象的。責任者の貴禄が感じられいつも落ち着いた態度で私達に接してくださったがその中にも子供達やバングラの良き発展への熱い思いが感じられた。
- ☆ アンブロスさん - ジャマルプールでは私たち8人とディボーションやシェアリングまですべて一緒に行動してくれたことで現在のバングラデシュの状態を知ることができた。女性陣に人気No. 1のハンサムな人でした☆
- ☆ ファルークさん - ネットロコナチームを親身になってお世話してくださいました。私たちのシェアリングにも加わってくださり、おかげでシェアリングは毎夜大議論となるのでした。マミにいたずらを仕掛けたりと、かなりお茶目な一面も見せてくれました。
- ☆ エリックさん - BDP プーバイルスタッフのお一人。たくましい体つきがかなりの迫力だったが、実は非常に心の優しい方。ほかのスタッフたちの冗談のせいで、悠希は危うくエリックさんにけんかを売るところだった。まあ、エリックさんなら笑って許してくれたと思うけど。
- ☆ オシムさん - 私達を短時間で様々な所に連れて行ってくれた運転手さん。何日間も乗っていたのに記憶にある中で抜かされたのはたった1回！！まさに名ドライバー。そして誰よりもイタズラ大好きで常にみんなを笑わせてくれた☆ オシムさんの「ごっそうさまでったあ！」は今でも忘れられない。
- ☆ オモルさん・オヨンくん - BDP スタッフオモルさんのお子さんがオヨン君。普段から私達と気さくに話してくれた陽気なオモルさんでしたが、オヨン君の前だとやはり「パパの顔」になりました。オヨン君は誰にでもおとなしく抱かれていてご機嫌さんでし

た。

- ☆ ショミルさん - 太鼓名人！！音楽が大好きでいつも私たちと夜遅くまで歌ったり踊ったりしてくれた。うまく言葉が伝えられない女性陣だったがショミルさんのおかげで緊張もなくなり、それ以来女性陣も積極的になりました。
- ☆ ステファンさん - アルバートさんの親友で、テクニカルスクールの責任者。眼鏡をかけたインテリタイプといった感じの控えめな印象。陽気なアルバートさんとは、きっといいコンビなんだろうな。ただ、質問をした際には非常に真摯に答えてくださり、内に秘めた熱さを感じさせた。
- ☆ ソンチョイさん - 物静かで口数の少ない方だが、ジャマルでのシェアリングでのソンチョイさんの発言は私達の心に深く響くことばかりであった。冷静な洞察や謙虚な姿勢には感心を超えて感動を覚えた。祈るという行為の尊さも気付かされた。ちなみに、「村長さん」ではありません…。
- ☆ ハビブさん - ハビブさんの話でびっくりしたことは、結婚のお話です。結婚式まで相手の顔を見たことがなかったという…。日本では考えられません。文化の違いなんでしょうね。一回、ハビブさんの奥さんを見に行こう計画が持ち上がったんだけど行けなくて残念でした。ハビブさんの笑顔は素敵です☆ 照れた笑顔も可愛いです。

(五十音順)

<BDP のスタッフとその活動>

BDP スタッフのみんなにはとても感謝しています。ツアーがとても楽しく、無事に終えることができたのは BDP スタッフたちの細かい配慮のおかげでした。

今回のツアーで短い期間でしたが BDP の活動に触れることができ、その活動が地域の中に根付いているのを見て BDP の活動が必要とされ、また評価されているのがわかりました。



また BDP で働くスタッフたちが地域の人間に信頼されているからこそ、こうした活動が発展していっているのだと思います。私のグループが訪ねた寺子屋での体験ですが、私は子供たちの多さに圧倒され、茫然としているとスタッフのバッセドウ

さんが子供たちをまとめてくれて何とか歌や演奏、折り紙など計画していた出し物ができ、その上、彼にバングラデシュの遊びを教えてもらい、子供たちとみんなで走り回ったのはとても印象に残りました。スタッフが村の住民に信頼されている証拠だなと感心しました。

バングラデシュの人たちは音楽が好きらしく、BDPのスタッフたちもいつも歌を歌って楽器を鳴らしていました。私たちも日本の歌をみんなで歌いました。言葉がお互いあまり通じなくても音楽や遊びを通して楽しみを分かち合える。そんなことを実感できたスタッフたちとの交流でした。

(和田耕一郎)

<BDPのスタッフ>

夕食後のシェアリングやスケジュールの合間の時間に BDP のスタッフといろいろな話ができたことも、今回のツアーの大きな収穫だった。眼鏡をかけたインテリタイプのステファンさんは、家族に教師が多いこと、汚職の多い政府関係の仕事に嫌気がさして BDP のスタッフに転職した経緯などを話してくれた。スタッフの中ではやや年長のファルークさんは柔和な笑顔の人で、ネトロコナでは親身になって私たちの世話をしてくれた。彼とは一度一緒に散歩をしたが、回りの景色を眺めながら、ネトロコナの人々や自分の家族のことを話してくれた。時々見せる淋しげな表情は何を物語っていたのだろうか。BDP のリーダーであるアルバートさんは風邪にもかかわらず、夜遅くまで私たちにつきあってくれた。オリエンテーションの時の話しによると、アメリカ留学の経験もあるアルバートさんは、寺子屋学校の活動を始める前は、地位やお金につながる仕事に就こうとしていたらしい。「天職」について考えさせられる話だった。彼ら3人は皆魅力的な人柄の紳士だった。

ここで BDP のスタッフを一人ずつ全員紹介することはできないが、彼らに共通していたのは教育を通してどうにかバングラデシュの発展に貢献したいという気持ちだった。Basic Development Partners という名前にはそのような気持ちがこめられているのだろう。私たちのことを知ろうとする気持ちや、もてなそうとする気持ちも BDP のスタッフに共通することだった。見習うべきところがいくつもあるように感じた。

(黒岩裕先生)

《スタディーツアー全日程》

3月1日(土)

8:30 成田に全員集合

* 皆眠い目をこすりながら出国手続きをこなす。

BODY CHECK の所で貴のハサミ取り上げられる。

10:45 タイに向け出発。(今回、バングラ行きの飛行機の経由地であるタイに一泊した。)

15:45 タイ空港に無事到着。ツインタワーホテルに向けバスで出発。

* 女性陣テンション上昇！トモジャは、この時点では
まだ落ち着きを見せていた。

ホテル着。夕食。

学校訪問の際の A、B、C チームのそれぞれに別れ、出し物の打ち合わせ。

3月2日(日)

7:50 チェックアウト。タイ空港へ。

10:30 バングラデシュに向け出発。

12:00 バングラデシュに無事到着。空港の周りには大勢の人。私達に「お金をちょうだい」と言ってくる子どもも。

12:45 車でプーバイルの BDP OFFICE に到着。

15:00 TEA&BISCUIT&オリエンテーション・自己紹介。

* アルバートさんをはじめ、BDP の中心となっている方々からその活動について、また目標などのお話を聞く。

OFFICE の周辺を散歩。

* スタッフをはじめ OFFICE の近所の方々とも交流。話し込みすぎてあたりが真っ暗に！！

19:00 バングラ初の水浴び。

＜バングラ食べ物紹介＞ バングラのおいしい食べ物を、主にゆーきの視点から紹介するコーナーです。

◎始めに

今回のスタディーツアーは、9日間という短い期間ではありましたが、非常に中身の濃い充実したものでした。その中で、メンバーそれぞれが、それぞれに体験したこと・感じたこと・学んだことがありました。僕たちが、笑い、喜び、驚き、そして時には、怒り、泣いた9日間。そのすべてをここでご紹介することはできませんが、この日程表によって、そんなツアーの様子を少しでも知ってもらうことができれば幸いです。

3月1日

(この日の日誌より)

- ◎ 米 - 行きの飛行機の中からバンコクのバスの中まで女の子がテンション上がりっぱなし。「もう箸が転がってもおかしいんだよね、あの年頃は。」……ってそういうトモコはちょっと年よりくさいぞ!?
- ◎ トモジャ - 現地の子と少しでも多くふれあえたらいいなあ。あとは体調を崩さない様に、はしゃぎ過ぎない様に。1人でも多くの仲間と語り合い、様々なことを吸収し学べたらいいなと思った。

3月2日

- ◎ 沙代 - 空港を出たら沢山のベンガル人。すごく視線を感じた。小さな男の子に「お金をちょうだい」とせがまれどうすればよいか戸惑ってしまった。あげられないんだけど、冷たくなんかしたくないし……って言う気持ちで何にも出来ない自分が歯がゆかった。
- ◎ 沙代 - 散歩の帰り道にスタッフの人達と沢山お喋りをしました。片言の英語で話す会話は新鮮だったけど自分の語彙力のなさに情けなくなった。でもこのスタッフたちは諦めずに聞いてくれるからほんっとあったかいと思いました。

☆カレー - ゆうきの日誌から抜粋。「カレーは酸味があってうまかった。ライムをかけて食べるのが新鮮だった。手で食べるのもかなり良い。考えて見れば触感も人間にとって大きな感覚の一つである。味が立体的だった。」

- * 星を見ながらの水浴び。心配だったが楽しすぎてすぐに気に入る。真美が早くも井戸くみの達人！！

20:00 夕食

- * 悠希はじめ一同バングラのモジャ（おいしい）御飯に感動。トモジャにより「激モジャ」という新語発生！！

21:00 福ちゃんによる晩禱。シェアリング。

このときのシェアリングでの自分を振り返り「ただバングラにいることにやけに興奮していたおめでたい自分がいた」と感じるメンバーも。木部Tの「明日あなた達は「知ること」の楽しさだけではなく、恐ろしさをも経験することになる。」という予言が今思い出される・・・。

3月3日（月）

6:30 起床

- * 4:30 頃、村中に放送で流れたコーランの放送により起こされた者多数。沙代、眠れず腹筋をして朝を待つ。

8:30 NEW MARKET に行くための迎えのマイクロが来るまで、歌ったり、楽器や、コマの練習。

10:00 NEW MARKET へ向け出発。のりちゃんは ACEF コミュニケーションの取材へ。

- * ドライバーオシムさん大暴走。沙代、車に酔う。皆、気を紛らわす為歌いつづける。

11:00 NEW MARKET 到着。

- * サロワカミューズ、ルンギ、バンジャビなどを購入。車の中から、買い物をした町で、たくさんの物乞いの人々の姿を目にする。—————→



☆ダルスープ - 豆のスープ、これも毎日食べた。スープなのに具が一杯でお腹が一杯になる。どろっとしていて御飯にかけて食べる。

◎ それぞれの思い①

<旅について>

俺が大学に入って学んだ事の中で一番大きなもの、それは知る事の楽しさである。この楽しさを知った事によって、俺の人生は光に満ちたものとなった。例えばそれは、本を読む事だ。本のページを一枚めくる度に俺は新しい考え方を知る事になる。そしてその出会いは、大きな感動と次のページへの心昂る期待感をもたらしてくれる。もともと俺は本を読む事が好きだったが、知る事の楽しさを学んだ事によって、その行為は劇的に姿を変えたのだ。しかし、本を読む事以上に変貌を遂げたものがある。それは“旅”をすることである。

“知る事の楽しさ”の観点から見た場合、旅は本の比ではない。旅と本を比べた場合、二つを決定的に分けるのは“知る事の恐ろしさ”の存在である。知る事は楽しい事であると同時に、恐ろしい事でもあるのだ。旅はその事を痛切に教えてくれる。文字を通してではオブラートにつつんだようにしか理解できない物事が、旅では“現実”という形で衝撃的に登場する。現実是我々の想像を超えて遥かに無慈悲かつえげつない。それに直面することによって、解ったつもりになっていた事が全て瓦解し、人は知る事の恐ろしさを認識するに至る。しかしながら、この恐ろしさもまた“知る事の楽しさ”の一部である。現実を知る事によって、新たな世界が姿をあらわす。そしてこの世界を知る事は、素晴らしい事なのである。

さて、今回のバングラデシュへの旅も、やはり知る事の楽しさ恐ろしさに満ちあふれたものだった。この報告書は、その体験で満ち溢れている事と思う。この文章を読んでいる人が一体誰なのか全く想像がつかないが、是非その点に留意しつつ読んで欲しい。

(榎本悠希)

3月3日

◎ ニューマーケットについて(貴のメモより)

- ・ 悠 - 施しを求める人々を直視する事すら出来ない。自分は偽善者にすらなれない。
- ・ 黒岩 T - 貧富の差 = 人間の社会の不完全さ。富める者としての私達。
- ・ 有 - 昨日までバングラを「居心地いい」と思っていた自分が恥ずかしい。
- ・ 紗・貴 - 現実を受け止める器のない自分。

みんな、それぞれに大きな「宿題」を与えられた一日であつた……。

☆カチャモリス - 緑色の唐辛子のような形の小さな野菜。一口目はピーマンのような味だが次第に口全体に燃えるような辛さがつ。悠希は旅中この食べ物にまとりつかれる。お疲れ様。

14:00 プーバイルの OFFICE に戻る。昼食。

BDP の学校の先生方との交流会。

- * それぞれメンディーという水等で落ちない染料で模様や絵を手に描いてもらう。このメンディーが色あせていくことでバングラでの日々が過ぎて行くのを感じた。

☆ 檀(だいたい)のメンディー色褪せ帰国日迫る (貴)

交流会が終わった後、スタッフたちとの宴。

- * バングラの歌を聴き日本の歌を歌う。こちらは「なんでだろー」も披露。

19:30 夕食。

悠希による晩禱。シェアリング。

3月4日(火)

8:30 ジャマルプール・ネトロコナに向かうバスを待ちながら、歌・楽器・コマの練習などをして時をすごす。

- * 米、ひたすらコマを回し続ける！！

10:00 ネトロコナ・ジャマルプールに別れ、それぞれのマイクロで出発。



～ ここから、いよいよ二手に別れてのツアーが始まる ～

<ジャマルプールチーム日程>

3月4日(火)(続き)

途中休憩を挟み、3時間ほど車に揺られる(というか揺さぶられる)。

☆ クラクション 鳴らしならされひた走る このごとき目でハンドルにぎる(紗)
ジャマルプールに無事到着。

14:00 * アンブロスさん、ソンチョイさんに迎えられる。

☆チャー - お茶。甘くて実は相当な量の砂糖が入っているようだがとても飲み易く何杯でも飲めてしまう。みんな大好きだった。お土産に買ったひとも多いが日本であの味を再現するのに一苦労。

と詰め掛けてきては、僕が写真を撮るたびに、「見せて見せて」と迫ってくる。束の間の人気者気分を楽しんだが、フィルムの枚数を気にしなくてすむ、と選んだデジカメも、こうなると今度は電池の残量が心配である。幾ばくかの心苦しさを感しながらも適当なところで切り上げて、後は「ナイ、ナイ」と繰り返して猛攻を凌ぎきった。

◎ “It’s mine”事件 子どもたちとの交流は楽しかったけれど、もちろんいいことばかりではなく、ここでもやはり「現実の厳しさ」も教えられた。

この日、子どもたちと交流する中で、僕たちが子どもたちに貸した(つもりでいた)ものを、子どもたちが返してくれない、ということが何度かあった。結局、子どもたちが自分の家に持ち帰ってしまったものも含めて、貸したものはすべて帰ってきた。しかし、一人の子どもの言い分に、僕らはずいぶんと考え込んでしまった。いわく、「あなたたちはお金持ちで、僕は貧乏だ。だから、僕はあなたのものをもらってもいいんだ。」という理屈だ。この日のシェアリングでは、この一言についていろいろな意見が交わされた。一方では、「まだ教育が十分に行き渡っていないが故に(オフィス近くに住んでいる子どもの多くは学校に通っていないかった)、そういった俗世間の大人が使っているような方便に子どもがたやすく影響されてしまうのだ。」という意見があった。しかしその一方で、「こういった所有の観念も世界では珍しいものではなく、僕らの価値観ですべてを判断してしまてはまずい」という意見なども出された。結局、明確な答えなど望むべくも無かったが、この事件がみんなの心に新たな宿題を与えたことは確かだった。

3月5日



◎ 洪水の多発するバングラでは、あぜ道が高く盛り上がっている。リキシャはその上をぶっ飛ばす。よくあれで田んぼに落ちない・・・。

(一続き) しかし、お互いに真剣にわかれようとするれば、何とか意思は通じるもので、そこまで心配する必要はなかった。ただ、向こうがベンガル語で何かをまくしたてているときは、まずは「バングラブジナ」と伝えておくことが重要であろう。

3月8日（日）

6:30 起床。バングラで迎える最後の朝。

7:30 朝食

* オシムさんの「ごっそーさまでったー！」を
聞くのもこれが最後。

8:30 メンバー数名、OFFICEの近くにあるグラミ
ンバンクを見学。→

閉会礼拝。（アルバートさんは体調不良のため欠席）



* みんな、それぞれの思いをこめて献金。使い古された1タカ札だけは、記念に持って帰った人が多いみたい。

バスが来るまで、スタッフと最後の交流。みんな、別れを惜しんで、写真を撮ったり、名前を書いてもらったり、今までうまく伝えられなかった気持ちを、がんばって英語で伝えようとしたり……。一同、スタッフに感謝、感謝、感謝！！絶対また行きます！！

* そんな中、木部Tのサックスが涙を誘います。

* 下はスタッフに捧ぐ耕ちゃんの歌。

☆ 国を憂い 我が身を捧げる彼らの上に 神の御加護がありますように（耕）

10:00 バス到着。

* いよいよ別れの時間が来て、全体になんとか湿っぽい雰囲気。そんな中、何かがぎっしり詰まったビニール袋を手に、オシムさんが一人ニヤニヤ。まさか・・・と思ったらやっぱりでした↓

悠希、アリさんとオシムさんの連携プレーにより思い出のカチャモリスを贈られる。

* 結局、オシムさんは最後までオシュビダだった・・・。

マイクロで空港に向け出発。様々な思いを胸にバングラを去る。

☆ バングラで 自分の夢を思い出す（トモジャ）

13:10 ダッカ発

* サロワカにジーンズという沙代、紗也香・有華・トモジャの姿に、スッチ一、「New Style！！」の眩き。

おそらく、バングラのような国を訪れたすべての人が、何かしらこういった葛藤を感じるのではなかろうか。そして、実は僕らの日常生活の中でも、こういった葛藤は避けがたく存在する。先入観やイメージだけで人を判断してしまうこと。この「異文化交流」における最大のタブーと戦い、苦悩した僕らの経験は、きっと僕らのこれからに大きく生きてくるはずだ。また一つ、宿題が増えた。

◎ 船戸先生の武勇(?)伝 …… 今回は一緒にできなかったが、昨年このツアーを引率され



たACEF事務局長の船戸先生は、数々の伝説をお持ちのようである。そのうちの一つに、ここ、ネトロコナの幅200メートルはあろうかという川を泳いで渡ったというものがある。何ともやんちゃな方だ。そういえば、準備会のときに「バングラ式のゆで卵の割り方」といって、僕の額にゆで卵をたたきつけたのは、船戸先生ではなかったか。

- ・ バングラデシュの緑について …… 諸先輩によれば、ネトロコナの景色はほんの50年程昔の日本の農村部のそれとそっくりだということである。つまり、日本がまだ戦後の復興期にあった、いわば発展のスタートラインに、いまバングラデシュも立っているということだ。だから、バングラデシュの将来はさまざまな可能性に満ち満ちている。そして、この日のシェアリングで僕は、「この緑を維持したまま、発展を遂げる途はあるだろうか」と問うた。僕には、この豊かなバングラデシュという国が、日本のような貧しい国を目指してしまうのではないか、という危機があったのだ。ファルークさんの答えは、「教育が重要」ということであった。彼は、個人的には、日本のように人々が時間(お金)に追われ、大切なもの("practice of love")をないがしろにする国を目指すことには反対だそうだ。しかし、もっと大切なのは、バングラの発展の途をバングラの人々自身が決めることだと、彼は言う。彼は愛国者である。自分の周りの人から始まって、バングラという国に住むすべての人にいたるまでが彼の愛の対象であり、その意味で彼は熱烈な愛国者なのである。その彼にとって、何よりも重要なことは彼の愛する人々が、自分たちの進む道を自分たちで選ぶことなのであり、決して誰か一部の人が発展の途を決め、そこに向かって人々を導いていくことではないのである。教育は、その基礎たる人々の判断力を養うために必要不可欠なものである。ファルークさんはこのような信念に基づいてBDPの

16:25 日本への飛行機経由地であるタイに到着。ここで7時間のトランジットタイム！

* いきなり物欲をかきたてられる真美&沙代、荷物当番をさぼって眠り続ける樫ちゃん、「無」になる有華、千昌夫化したさやか……。それぞれのあつという間の7時間。

24:40 タイ航空機にて成田に向かう。

皆、さすがにお疲れ……。『無敵』と思われたコメ・真美もとうとう体調を崩す。

3月9日(月)

7:30 成田着

* 悠希のカチャモリスも、無事税関を通過。持たされていた貴も「ほっ」。

最後の礼拝をし、解散。それぞれ様々な思いを抱いて家路につく……。



お疲れ様でした～！！

最後に一句……

☆ 幸せは 自分の心が決めるもの (トモジャ)

活動に携わっているのであった。ファルークさんに限らず、BDP に関わる人々のあふれるような熱意はこのような確固たる信念が源となっているものなのだろう。改めて背筋の伸びる思いがした。

3月7日

◎ ラップアップミーティングの内容から(貴のメモより)

- ・ 米 - 9日間のツアーで学んだことは沢山ある。e.g.ファルークさんの言葉から。→「日本は発展していて豊かだが批判すべきところもある。お金を稼ぐ為に色々なこと(特に“practice of love”)を見失っている。そのような発展はしたくない。」そのためにも、まずは教育が重要。バングラの人たちには、上から押し付けられる形ではなく、自分達の意思で発展の途を選んで欲しい。
- ・ 沙代 - 自分の中の引出しが増えた。現実を知る事は楽しい事ではなく、戸惑う事もあるが、やはり重要なことだ。
- ・ 黒岩 T - どこでも子ども達は花を沢山くれた。彼らには、たとえ我々より貧しくとも人に何かを与えようとする心がある。その心に感動し、自分も見習っていきたいと思った。
- ・ スタッフ - あなた達の国日本の子どもは恵まれているのに、バングラの子どもの事も考え、愛してくれてありがとう。また、バングラの発展の為に努力に協力してくれるACEFには、いつも感謝している。

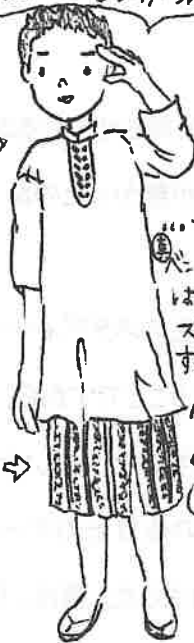
オアライクム アッサラーム
(おはようモサール)

Boy ♂

パンジビ
ひざより長い
薄手のシャツ

※パンジビ+ルンギ
は Non formal

ルンギ
布を簡単に
縫ったスカート
のようなもの



でも実は
大人ガレム(男)
はシャツに
ズボンだより
する。

パジャマ
(ズボン)
場合も
ある。

アッサラーム アライクム
(またはおはようモサール)

Girl ♀

ディブ
ひたいに縫うシワ
カラフルだったり形も
色々。

カミーズ⇒
薄手で洗
しやすい
色々な色と柄有り

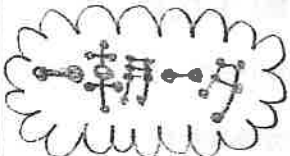
チュリ⇒
サロワカミーズに
合わせるオシレサ
サロワ
ヒモは別売り
薄手のズボン

⇒ 足元はビーズ⇒



⇒ オロオ(スカーフ)
これが無いと
スカートはかけないの
と同じ(よく忘れる?)

メンディー
おまじないのようなもの
恋人の名前を書ける
こと...



おまけ☆1
男の子のみ

これでアナタも

ベツガル人!?

おまけ☆1



ホクロ & まゆげ
神様がホクロや
まゆげにジエラるのを防ぐため

バンラデジュのムクダはよく見ると涼しい

おまけ☆2



大人も子供も
女性には鼻ピアス

穴が無いと結婚
できない!!



着たくても
着れず...

無いがゆえに得たもの

木部尚志

今回のスタディー・ツアーでの経験は、「あるものを欠如させているからこそ、何かを得る」というものでした。何を欠如させていたか？何が無かったのか？ひとつは船戸先生です。もうひとつはアワン少年との再会です。

今回は、船戸先生が参加しない、それゆえかなり異色のスタディー・ツアーと言えます。船戸先生の代わりのチームリーダーが僕ということですから、異色度もさらに高まったに違いありません。一番大変だったのは、井上儀子さんです。船戸先生の分の仕事をお一人で担われたわけですから。代役の名目上のチームリーダーは、実質上の(影の?)リーダーのお陰で随分と助けられました。実は、「無いもの」は船戸先生だけではありません。船戸先生の強力な個性と比べたら、僕のリーダーシップは無いも同然だったのです。しかし、この「無い」のお陰で得たものがあります。それは、スタディー・ツアーの参加者の自発的な働きでした。色々な状況において、みんなは自分の頭で考え、行動しました。奇妙な対比を使っていえば、イエス・キリストが十字架につけられたのは、「へりくだり」の象徴的出来事でしたが、そののち天に上げられました。僕の場合、そもそもリーダーシップにおいて「へりくだる」必要もなく低かったので、みんなが自発性を高めてくれたのでした。

今回、スタディー・ツアー参加を決めたとき、去年の春訪れたネトロコナに再び行けるものと、勝手に思っていて喜んでいました。あそこで出会ったアワン少年に再会できると期待していたが、甘かった。井上さんが取材のためにネトロコナに行く必要があると聞き、自分にはそれに匹敵するほどの必要性がないことに気付く。あの元気な少年に会いたいけれども、会うことがACEFにとって万難を排してまで優先される

べきことだとは、どうしても思えない。そこで僕は、密かにネトコロナ・チームを羨望のまなざしでみながら(微々たる呪いもかけつつ)、ジャマルプールに大いなる期待を寄せ、かつまたジャマルプール・チームに親愛なるまなざしを向けることにしました。大人や子供との出会い、スタッフとの語らい、チームの人間関係のすべて、河と船と『シッダールタ』、二つの「ボロ」、テゼの静謐、中華風バングラ料理、和歌大会。このチームと過ごした時間はとても濃密で、思い出に残るものとなりました。

今回のスタディー・ツアーで、「あるものが無い状況そのものから何かを得る」という貴重な経験をさせて頂けたことに、本当に感謝しております。次回こそはアワン少年に会えるか、と期待しつつ、

ジャマルプール

members



yûki



kibe



yuka

ジャマルプールに幸のとなりに斐彦あり

スタディーツアー は終わったけれど

東京女子大学文理学部日本文学科2年 黒沢 貴子

バングラデシュから帰国して2日後、ある友人と会う約束をしていた。専らの話題はバングラの土産話。私は出来上がった写真をみせながらその時々光景や状況、仲間の事、自分の思いを語った。きっとバングラに行ったことそこで様々な事を経験し感じた自分に満足していた。でも一方で何かこの旅でし忘れたような気持ちもあった。

私の熱い話を長々と聞いた後、口を開いた友人はこう言った。「お前はバングラに行っていていい仲間と会えたとか、その場その場で多感したことをさんざん言っていたけどそんな単純な事のためにバングラに行ったの？それだけなの？その場その場が充実していればそれでいいの？ こういうツアーの目的ってそんな単純なものじゃないんじゃない？そこで見た事感じたことを考えて未来の自分に繋げていくものなんじゃない？」

これを聞いた瞬間、私のバングラでの日々に欠けていたものがわかった気がした。それは多分「考える」こと。スタディーツアーの意義はやはり、今まで知らなかった事を実際に自分の体でもって学び、感じそしてそれを考える事にこそある。なのにも、*「あなたはバングラに行ってなにを考えたの？」*と聞かれたら私には自信を持って挙げられることがきっと1つも無いのだ。これは旅をまっとうしきったとも言えないと思うし、何より自分のバングラでの在り方はバングラの方々、特にBDPのスタッフ、そしてACEFの方々に失礼だったのではないかと自責の念にかられた。

自分自身の事について考えた事、これは確かにあった。しかし、バングラやバングラの人達については全て、感じた、思っただけで終わっていた。……子どもが目美しい事、物乞いの人々に出会ったときの「人間の立場はいかにして定められるのか」という思い、実際人間には何が一番大切なのだろうという素朴な疑問、貧しさ、豊さ、この旅で一番心に残った「何が行なう事よりただそこに存在する事が尊い」というテーゼのエリック神父の言葉……これらは全て思ったことや感じたことだ。でもここから何かを見出そうとしたり、これらを真剣に納得いくまで考えた事は一度も無かった。自分の中の問いとしてみた事はなかった。

バングラでの出来事は私にとって非日常だ。だから私にとって確かにその全てが大切であったし、今しかできない事だった。・・・・・・緑の水田の中を子どもと手をつなぎ散歩する事、マイクロバスの中から見風景、歌を歌いながら見上げた空・・・・・・とにかく全て日本の日常ではできない事。だからその瞬間瞬間を楽しむ事に私はとても忙しかった。

でも、もし答えが出せなくても、出なくても、バングラの地で自分が納得いくまでこの国について、この国の人について自分に問い考える、立ち止まる時間を私は持つべきだった。きっとその時考える必要があった。なぜなら衝撃や瞬間の思いはどうしても薄れていくものだから。v vなのに私は一瞬思いを浮かべる事はあってもそれをつきつめて考えなかった。多分友達の指摘した「その場だけの充実」にしまっていた。

「出会いとは運命」ってまた私に思わせるそんな仲間と数々のすばらしい経験ができた。これは絶対のものでその価値は変わらない。ただスタディーツアーは確かに単に仲間を得る旅、瞬間の充実を得ればいい旅ではない。そこで得たものから何を自分に、そしてバングラに残していけるかだ。

私はバングラで考える時間、立ち止まる時間を持たなかった。これは本当に私の失敗だ。でもずっと悔やんでいても仕方が無い。私はその分これからバングラディッシュという国に目を向けて行きたい。少しでもかかわっていたい。そして今度こそ思いに終わらせず考える時間を持ちたい。

最後の最後はこれからスタディーツアーに参加する方に。バングラのために考える時間をバングラでの日々の生活の中で作ってください。きっとこのツアーを一層有意義なものにするはずです。

スタディーツアーの日々旅の雑記帳から一

福田佳也

1. 輝く子どもたち

バングラデシュで、しっかり、子どもに向き合えるだろうか？この問いがいつも胸のうちにわだかまっていた。実際に出かけて見ると、子どもの大きな目は、キラキラと輝いていた。真っ白い歯、こぼれる様な笑い顔、人なつこい表情で、なにかをアピールする。残念ながらベンガル語で判らない、自分が情けない。折り紙や紙鉄砲、はては、"Hadodo"といわれている現地のあそびで、遊んでもらったと言う方が本当だろう。はだしの子どもも少なく無かった。最初は、とまどった。だんだん慣れてくると気持ちがほぐれてきた。最後は、理屈ぬきに楽しい時間であった。

2. 贅沢な時間

バングラデシュでは、贅沢な時間をたくさん頂いた。アルバートさんは、夜、「星がきれいにみえるから外へ行こう」と誘ってくれた。満天の星の、輝きが違う。そして、静寂そのものだった。4日目、川へ案内してくれて、船で川下りとしゃれこんだ。船上を涼しい風が吹き抜けて、時間がゆったりながれていた。

バングラの人は、心底、音楽が好きだ。朝でも、夜でも、時間があれば音楽を楽しんでいる。宿泊室の隣のオフィスから聞こえて来る楽器の響きに身をまかせているのも、心地よい時間であったし、夢うつつに聞こえた未明のコーランの放送も忘れがたい。そして、テゼの修道院の黙想の時間は、心に沁みて、自分に向き合う時間であった。そこには30人位いたであろうか、かすかに人の啜り泣く声が聞こえた

3. 非日常の世界

ダッカの喧騒は、聞きしに勝るものであった。次から次に押し寄せて来るリキシャ、それをかわしながら、時には80キロのスピードで走る自動車。オンボロのバスにすし詰め乗客、その屋根にも、たくさんの人が乗っている。誰もが物乞いの少年や少女に戸惑い、対応に苦労した。3度のカレーの食事、それを右手でこねて口に運ぶ習慣、紙を使わず水と左手で処理するトイレ、水風呂、連夜の停電のためのランプ生活、蚊の大攻勢。一方、ジャマルプールの素朴な田園風景は、私に、敗戦直前に岩手県に疎開していた頃を思い出させた。それら非日常の生活が、数日で馴染んでくる人間のつよさ。反面、自然破壊と飽食を続ける日本の姿があぶりだされる思いがした。同時に、素朴な豊かさを失っているのだろうか。

4. シェアする

辞書を見ると、Share 分け合う、共有する、とある。このスタディーツアーには、毎晩、一日の体験をシェアする時間があった。ひとりひとりの体験が述べられて、積み重ねられ、蓄積される。「今回のACグループのシェアは、内省的だった」と言われた。自分とどう向き合ったかをシェアしたのである。BDP

のメンバーとのシェアもあった。さらに、ACグループでは、ひとりのメンバーの提案で、各人が、それぞれ短歌か俳句をつくり、最後に選考会を開き、優秀賞を選んだ。各人の感性をシェアすることになり、いい試みであった。

日本とバングラデシュの違いを見つけるより、シェアできるところを広げて行くこと、とくに、教育についてシェアすることが大切ではないか、と感じた。

最終日の朝、バングラデシュの貧困問題解決に大きな実績をあげたと言われる小規模融資で有名なグラミン銀行がプーバイルの事務所の至近距離にあると聞いたので、訪ねてみた。支店長がおられた。2人のマネージャー以外のスタッフはメンバーのところに出かけて、回収をしたり、メンバーの相談にのるために、出払っているという。机上には細かいメンバーの出入金の記録が置いてあった。ここでも、貴重な資金をメンバーでシェアしている様子がうかがえた。

5. BDPのスタッフ

今回も、BDPのスタッフの献身的なサービスの提供には感謝の言葉以外ない。なにより、主催者アルバート・マラカールさんの目のつけどころと志の深さに感服します。ジャマルプールで、ソンチョイさんが、「時間とお金と労力とを使って、その上、わざわざジャマルプールの田舎まで足を運んで下さったその熱意に感謝します」と述べられた。この謙虚さにうたれた。お礼を申し上げるべきは当方である。BDPの協力があって、はじめて私たちは、教育の原点に触れることができたのだから。

現地でお目にかかった人では、エキュメニカルを説かれたテゼのエリック・ブラザーや岩本直美さんも話も心に沁みた。

6. 隅谷先生の志を継ぐもの

私たちが、バングラデシュに向かう飛行機の機上にあった時、地上では、ACEFの隅谷会長の告別式が行われていた。私にバングラデシュ行きを勧めて下さった先生は、もうおいでにならない。これだけは、残念でならない。先生の志を継ぐ若者が続いて欲しい。最後まで、先生は青年との対話をなにより好まれた。



11月21日にアムステルダム
ひとやあり fuku

私がACEFのスタディーツアーに参加しようと思ったのは、幼稚園の先生になりたいと思って児童教育を学び始めたのに学べば学ぶほど「子どもの教育」というものが分からなくなっていたことと、人に優しく出来ない自分が嫌になっていた時に船戸先生にお会いしてスタディーツアーの事をお話してもらった時だった。

バングラデシュで毎晩行われるシェアリング。これが私にとって大きなものだった。もちろん感じる事はいっぱいあったが仲間の考えや想いを聞き、自分の事想いを話す事で改めて気付くことがいっぱいあった。特にジャマルプールではBDPのスタッフも入ってくれて、見るだけでは分からない現状を話してもらった。教育が行き届かないためにトイレの作り方がわからなく、トイレのない家もある。そうなるとう衛星的によくない。そして様々な病気を引き起こしてしまうことだった。日常生活のほんの一部でさえ教育が行き届かないことが、社会的に様々な問題を起こしてしまうという事に今まで気付かなかった。日本にいて当たり前を受けていた「教育」を改めて考えた。

スタディーツアーに参加するまでは、バングラデシュに一方的な援助という事しか頭になかったが、今は実際に見て共に感じる事ができたらいいなと思うようになった。

バングラデシュから帰国して何をどの位学んだかはまだよくわからない。しかしこれから生活していく中で何らかの影響があるという事は感じている。最後に最近の日本の子どもは変わったというけれど変わったのは子どもではない。変わったのは大人である。」と私は思う。今の段階で私の中で答えが出たのはこの事だけである。



シェアするということ

中野紗也香

私は今まで未知の場所へ行ったり、未知の食べ物を食べたり、未知のものを見たり、未知の音楽を聴いたとき、それらと自分の既知のものとを比べる事が多かった。しかし今回、比べるのではなく分かち合うことの大切さを学んだ。日々の生活においては食事を分かち合い、言葉を分かち合い、音楽を分かち合い、笑顔、涙をふくめたそれぞれの旅に対するまた自分の人生に対する思いを分かち合う時も持てた。学校訪問などのバングラデシュの子供と過ごす時間は言葉はわからなくても、何らかの形でコミュニケーションを取り、一緒に時間を分かち合った。『何かをするのでは無く只そこにいることだけが重要』この言葉はテーゼにいるブラザーの言葉で、私にとって衝撃的だった。確かに日本から寄付や援助をすることよりも、現地に行き行動することの方が遙かに意味があるし、また、教えることやパフォーマンスを見せることの方が一緒に何かをしたり、ただ傍に座っていることよりも楽なのだ。一方的ではなくお互いがお互いにとって良いと言うことはとても難しい。

次に経済状態を考える。シェアできない状況と現実を知ったとき私達はどうすればいいのか。目の前に困っている人が居る。しかし困っているのはその人だけではない。また困っているように見せかけているだけかもしれない。宗教上の理由、生きるための選択。今考えればあの時のタカは何か違った。汚い自分自身を映していたからかもしれない。お土産を買うためにタカを持っている。当たり前と言えば当たり前のことなのに、心は穏やかではない。何のためにバングラに居るのか。綺麗な景色、温かい笑顔、それだけではないバングラデシュの現実には、何もできない自分が居て、情けなくて、悔しくて、複雑な心は、あのときの気持ちは、今も消えない。

「自分自身を成長させたい」こんな気持ちで臨んだバングラデシュで得たものは、不透明ではっきりとは言えない。どうだった？と聞かれるたびにとりあえず返す「すごく良かった」。これはもちろん嘘ではない正直な気持ちだ。でも私の心は、それだけじゃないことも、そんなに簡単に口に出来ないことも承知している。只言えることは家族、友達、全ての私が出会ってきた人、してきた経験に対して「ドンノバット」と言いたい気持ちに初めてなれたということである。

シンプル、けどとても大切なこと

橋本有華

ツアーの間、ずっと考えていたことがある。`自分のよりどころ、信念はどこにあるのか`ということ。これは自分の担当していた聖書の箇所が大きく影響している。『富を地上に積むのではなく、天に富を積みなさい。』というのが自分の担当の箇所で、私は次のように解釈した。時間の経過によって変化する世俗的な観念にとらわれるのではなく、目の方向性を天に向け生きよ。そこまで解釈したものの、自分の中にあるベクトルが定まらなくなっていた自分にはとても酷な箇所であった。原稿を考える、すなわち自分にとって天とはどこにあって何であるのかを考えることであり、難しいテーマだったからである。しかし、自分と向き合うきっかけと時間を与えられたのだと思い、真剣に考えようとしたし、逃げずに考える努力をした。最近、物事を深く考えることを避けていた。日々課題に追われる毎日で、立ち止まった途端、緊張の糸が切れてしまいそうで恐かったから。取り残されてしまいそうな不安から、とにかく今は何も考えず、前へ前へ、試験が終わったら時間が出来たら立ち止まってみよう、それからゆっくり考えてみよう、それまでは...と必死になって日々の生活をこなしていた。このような生活に疑問を持っていたし、なぜもっと余裕を持てないのか、学校に対して、そして何よりも自分自身に対していらだちもあった。そうしたもやもやした生活の中、次第に今目指している職業に対しても、以前のような強い意志を持てなくなっていた。将来の`夢`というより、将来社会で生きていかなければならないという`現実`があるからやるしかないと少し投げやりな気持ちになっていた。寂しい考え方だけれども合理的であったし、何よりも楽だったから、そう考えるようにしていた。こんな頑固でガチガチになっていた頭が、徐々に、ごく自然に、バングラデシュの人々や生活、時間、そして一緒にこのツアーに参加した仲間によって、壁が崩れ、素直に物事を考えられるようになっていった。バングラデシュでの体験は新鮮で、かつ総てが刺激的で、小さな出来事でも心が素直に動いた。子どもたちの笑顔が嬉しくて嬉しくて胸がいっぱいになったり、頭であれこれ考える前に泣いたし笑った。貧困の現実の厳しさを目のあたりにして息が詰まるほど苦しくなったり、はたまたそのように同情している自分が嫌でこの行き場のない思いをどのように消化したらいいのかわからず途方に暮れたり...そんな

どうしようもない思いを悟ったはずなのに、物価の安さから目が眩み、物を買
 込んで、まるで富を見せつけるような行為をし、全く学習していない自分が恥ず
 かしくて恥ずかしくてひどく打ちのめされたり...ひとつひとつのことに敏感だ
 った。日本では味わうことが出来ない感情に、戸惑い、悩み、考え、そして本当
 の喜びや、本物の富や幸を頭で考える以上に心で感じる事が出来た。私の頭と
 心は感動でフル回転だった。また、自分の問題が次第に見えてくるようになっ
 った。旅の間ずっと考えていた自分のよりどころについて、自分は何を求め、何をし
 たいと思っているのかという具体的な将来の方向性について、バラバラに考えて
 いたことが繋がり始めた。考えがひとつのことに集結した時、何故か涙が止まら
 ずあふれてきた。テーゼという修道院でのこと、自分でも驚くほど、恥ずかしく
 らい泣いてしまった。時が止まってるかのような不思議な空間と雰囲気呑まれ、
 自分と真真正面に向き合えた瞬間、とても単純であまりにシンプルで、でも、と
 ても大切なこと、自分は幸せなんだ、と、ふと、突然気が付いた。人の笑顔ひと
 つで心が温くなる。私達を喜ばせようと花束を差し出してくれる子どもがいる。
 与えられるばかりで何かをしてあげたいと必死で何かを探している自分もいる。
 しかもごく自然に純粋に自分のためではなく人のために何かが出来ないかと考
 える自分がいる。誰かのために考えられる余裕がある。それだけじゃない。自分
 が冴えない顔していたら気に掛けてくれる人がある。側にいてくれる人がある。
 私には物質的にも精神的にも帰る場所がある。このことがどんなに幸せなことか。
 自分は幸せだ...あまりにもシンプルな答えで言葉にすると重みがないけれど、私
 にとっては大きな発見であり、漠然と感じていた不安や迷いがすーっと晴れて、
 清々しく、とても気持ちよく心が洗われてゆくのがわかった。私はこの旅を通
 して足元にある幸せに気付くことが出来た。今までこのことに気付くことが出来
 なかったのは、自分の心が豊かでなかったからである。そのことに気が付けたこ
 と、また、とても素直になれたこと、そのことがとても嬉しい。4月からまたあ
 の学校生活が始まる。その前に立ち止まって考える時間があったことは実に意味
 深い。あのまま突っ走って新学年を迎えることになっていたら、いつかプツンと
 きていたに違いない。しかし今はプツンとこない自信がある。自分にとってのよ
 りどころを見つけたからである。バングラデシュでの経験はあまりにでっかくて
 言葉にするのが難しく、伝えきれないもどかしさを感じながらこの報告書を書い
 ているが、これだけは確実に伝えたい。行ってよかった。バングラデシュで学ん
 だことを自分のよりどころにして信じ続けたい。

スタディーツアーを通して考えたこと・学んだこと

和田耕一郎

今回のスタディーツアーに参加し、非常に多くのことを考えさせられ、また自分自身そこから学ぶことがとても多かった。海外に行くということ事体が自分にとって新しいものとの出会いだが今回のスタディーツアーは海外旅行と違ってその国の現状を見るだけではなく、実際バングラデシュの人たちに囲まれ、現地に住む外国人と話し、ツアーのメンバーと思ったことをシェアすることで自分とは違う見方を知るといった本当に濃密な時間と出会いをした。

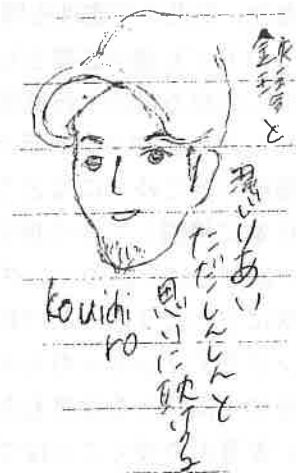
今回のツアー出発前に考えていたことに対する疑問がなんとなく浮かんだと思う。その疑問とは発展途上国に援助は必要か?といったことを考えていた。日本にいて発展途上国に対する援助について聞くことや本などで知ることは大抵、援助の結果がネガティブなことが多い。支援事業が環境破壊に到ってしまったとか富裕層のみが援助金で私腹を肥やすという内容の記事を目にする。日本という国がそういう点のみを指摘したがるお国柄なのかもしれないが。それとただ支援金を与えることだけがその国にとって自立を妨げるなどといった観点からプラスなのかという疑問もあった。しかし、バングラデシュでBDPの活動、寺子屋訪問などバングラデシュの現状を短い期間とは言え、目の当たりにし、援助に対する考えが変わった。

寺子屋というものを日本で写真として見たことはあったが実際それをジャマルプールで見たとき、“何これ?こんなところで勉強できるの?”と驚いた。ほんとにトタンの屋根を石の柱が支えているだけで壁がない。生徒は地面に布を敷き、その上に座って先生の喋ることに耳を傾けている。プーバイルの学校を訪問したときは授業している中に入って算数の計算をしている子供の横に座った。自分の横にいた男の子を見ると短い鉛筆の両側を削って薄汚れたノートに一生懸命計算していた。その姿を見ていたら「がんばれ!」と叫びたくなった。自分もこの子みたいに算数の計算をしていた頃があったかなあと忘れてしまった昔を思い出しながら急にこの子に自分の机の引出しに余っている文具をあげたくなった。今振り返るとこうした気持ちが本当の援助なのではないかと思う。貧しいからかわいそうだ、物乞いの人が哀れだからお金をあげたいというのは偽善ではないだろうか?持つものが持たないものに対する偽善だと思う。自分が感じたのはこの

男の子にがんばってもらいたい、自分と彼の間には貧富の差があるのは事実だが学ぶということはそれに関係なく、誰しものがそれを平等に受けてもらいたい、学ぶ楽しさとそこから出てくる新しいものを得られるのが貧富の差によって異なるのは同じ人として嫌だというものだった。自分で言うのも偽善っぽいがあの時一人の人間として本心から思ったことは援助というのは平等な立場に立って相手を理解し、相手の自立を願った思いやりから生まれるのではないかということだ。

それと同時に相手を理解し、受け止めるということは生半可なことではないし、相当な覚悟がいるのだということがわかった。テーゼの修道院を訪ねた時のブラザー・エリックの言葉はそのことを一番物語っている。“To be is more important than to do” 彼の話した言葉そのままではないかもしれないがその意味は自分にとって非常に心に残るものだった。“与える”ということは与える物さえ持っていればできる。しかし“その場にいる”ということの方が重要であり、そして難しいのである。その場に一緒にいることこそが相手をより理解するために重要なのだ。そういう意味が彼の言葉にこもっていたと感じた。

自分が今回のツアーで感じた支援の意義を、どのように今後反映したいかはまだわからないが、ただ結論として人を助けたい、援助したいという気持ちは人間の中にあるとても自然で高尚な部分であり、こうした気持ちを発展途上国の援助に限らず、日常の暮らしの中でも育てていきたいと思った。



旅はまだ終わらない

黒岩 裕

この春、バングラディッシュ・スタディー・ツアーに参加する機会に恵まれた。出発前は仕事で十分な準備ができなかったうえ、風邪気味で体調がよくなかったこともあり、多少の不安を抱えて成田を立つこととなった。しかしながら、バングラディッシュでの7日間は予想を超える素晴らしいものとなった。

バングラディッシュはかつて世界で最も貧しいと呼ばれていた国である。滞在中も裸足で歩いている大人や子どもを数多く見かけた。上下水道は整備されておらず、雨季には汚水と飲み水が混ざって伝染病が広がり、多くの死者がでるという。幹線道路にも信号がほとんど設置されておらず、道路一杯に人や力車や自動車が行き交う様は、いつ事故が起きても不思議ではない混沌と喧騒の状態だった。

この国が貧しい原因の一つは、教育の普及がまだまだ不十分な点にある。例えば、2000年度における15歳以上の人々の識字率は56%に過ぎない。BDPが寺子屋学校を設立・運営する目的は、貧しい階層の子どもにも教育を提供し、教育を通して社会全体の底上げを図ることにあるとスタッフの一人から聞いた。

今回のスタディー・ツアーで、私はネトロコナにある3つの寺子屋学校を訪ねることができた。ネトロコナは首都ダッカから車で4-5時間の距離にある北部の農村地帯である。ネトロコナ滞在中に学校や近所の子ども達と接して印象的だったことは彼らがみんな明るい顔をしていることだった。物質的に貧しいことすなわち不幸とする見方は、先進国の住人の傲慢かもしれない。子ども達は遊ぶことを楽しみ、日本からの来訪者に花を贈る心もち、その表情に不幸や暗さを読み取ることはできなかった。勿論このままで良いわけではない。必要最低限の衣食住、将来の可能性を開く教育、命と健康を守る医療はバングラディッシュの多くの子ども達が必要としている。ネトロコナでもう一つ印象に残ったのは果てしなく広がる緑の水田風景だった。夜空の星と水田の蛍も息を呑む美しさだった。これらの自然やバングラディッシュの文化と伝統の良い面を残しながらこの国を発展させてゆくにはどうすればよいのだろうか。

日本に帰国してから旅の余韻は手のひらのメンディ同様日ごとに薄れていった。私たちは今回のバングラディッシュ・スタディー・ツアーの経験を日本での日常にどのようにつなげればよいのだろうか。私は今回のスタディー・ツアーをバングラディッシュの人々と社会を理解する最初の一步と考えている。今回の経験を学生に伝える仕事もある。日本にいてもバングラディッシュで抱いた様々な思いを育ててゆくことはできるだろう。その意味で旅はまだ終わっていないのかもしれない。

バングラで学んだこと

千品真美

私がこの旅で学んだことは、本当にたくさんあります。今の自分自身、日本での生活、バングラの人々の生活の貧しさ、バングラの人々の心の豊かさ、NGO の活動、国際協力など、旅に参加する前に予想していたよりも多くの事を学んだ気がします。物乞いをする子どもたちなど悲しい現実を目の当たりにして、戸惑うこともありました。現実を見る恐ろしさも心から実感しました。やはり、頭ではわかっていても、実際に行ってみて知るのとは大きな違いがあります。

そう実感した体験がひとつありました。初め、私はバングラの人々を「貧しい」という先入観から、彼らを見ていました。誰でも初めは先入観を持つものだと思いますが、その先入観は私の彼らを見る眼を曇らせていました。それを実感したのが、ネトロコナでの体験でした。そこで体験したことによって、私の目を曇らせていた先入観は、そこで涙とともに流れました。その先入観が取り除けたとき、バングラの人々の心の温かさ、豊かさを実感しました。自分の先入観というものが、バングラの人々を見る眼をどれだけ曇らせていて、本当の彼らの人間性を見ることができていなかったかがわかったとき、私は自分が恥ずかしくなり、涙が止まりませんでした。

先入観というものは誰もが持っているものであるし、人間である限り、それは仕方ありません。しかし、自分が持つ先入観をまず知って自分自身で取り除いていくことが本当に重要なことである、と私は思いました。国際協力においても同じことが言えると思います。ただ貧しい国であるからといって、こちらの一方的な先入観、判断から援助をしていては、本当に相手が求めているものが何かはわかりません。実際にその場に行き、そこの人々と同様に生活をして、人々と触れ合うことによって初めて、彼らが求めているもの、自分たちにできることが何かがわかるのではないのでしょうか。日本の国際協力もそういう方向に向かっていかなければならないと思います。そしてただこちらが教えてやるという気持ちではなく、相手から学ぼうとする気持ちがなければ真実は見えてこない、私はこの旅で実感しました。

この貴重な学びが色褪せていかないように、この旅で出会った仲間と共に、これからも様々な問題について語り合っていきたいです。

自問

米田辰也

ニューマーケットからの帰り道。車の中で、僕は泣いていました。涙は出て来ませんでした。でもあの時、僕は、確かに泣いていたんだと思います。「間違ってる。」そう繰り返しながら。何が間違っているのか。それは分かりませんでした。でも、何かが間違っていたことは、確かなのでした。

その日、僕は、僕のお金を使って、ニューマーケットで買い物をしました。そのお金は、僕が、バングラデシュへ発つぎりぎりまで、日本でアルバイトをして貯めたお金でした。母と妹へサロワ・カミューズを一揃いずつ買い、チャー（バングラデシュの紅茶）を1kgと、自分用にパンジャビとその下にはくズボンのようなものを買いました。ルンギは動きにくそうなので、買うのはやめました。全部でいくらぐらいになったのでしょうか。よく覚えていませんが、日本円に換算すれば、驚くほどの安さであったことは間違いありません。

買い物が終わり、ほかの組が買い物を終えるのを待っている間、僕らの周りにはあちこちから人々が集まってきました。車椅子に乗った老人とそれを押す少年。ぐったりした子ども（まだ1歳かそこらでしょうか）を抱いた母親。両手いっぱいたくさんのプラスチックの容器を抱えた少年。そういった人々が、一斉にこちらを見つめ、何か話しかけて来たのでした。

「ああ、この人たちは、僕に、僕のものを譲って欲しい、と言っているんだな。」僕はそう解釈しました。そして当然、それを拒否しました。

「物乞いに安易にお金や食べ物を与えてはいけない。そんなことをしたら、彼・彼女らはまた同じことを繰り返してしまうことになる。それに、そんなことをしたって、事態の根本的解決にはならない。」そんなことは、僕にとって常識であるように思われました。ですから、僕の対応はごく当然のものでした。そうであったはずなのです。

そうしている内に、待っていたほかの組も買い物を終え、僕らはマーケットを後にすることになりました。僕らの周りにいた人々は、僕らが車に乗り込んでもまだ、あきらめようとはしませんでした。その内の一人、片方の脚を引きずった

少年が、今にも泣き出しそうな表情で、何かをこちらに訴えかけていました。車が走り出しました。バックミラーの中で、それでもまだ彼は、何かを叫び続けていました。

彼が言っていることは、ベンガル語を学んでいない僕には、ほとんど分かりませんでした。でも、ただ一つ、僕にも聞き取れた単語がありました。

「ジャパネー」

日本人、という意味でしょうか。彼は随分とこの言葉を繰り返していました。

そう。僕は日本人です。生まれたときから日本という国に住み、日本語を話し、日本国のパスポートも与えられています。そして、彼はベンガル人でした。僕にはよく分からないベンガル語を話し、そして恐らく、生まれたときからバングラデシュという国に住んできたのでしょうか。

望みもしないのに……。

いったい何が間違っていたのでしょうか。

いったい何が、僕をあそこまで追いつめたのか。

同情や憐み、そういった種類のものだったのでしょうか。

そうなのかも知れない。

けれど僕はあの時、「間違ってる。」と思ったのです。「何かがおかしい。」とも思いました。

悲しんでいた、というよりも、むしろ、ただ無性に腹を立てていた気がします。

そういえば、あの日、あの片脚を引きずった少年は、いったい何をあんなに怒っていたのでしょうか。

バングラデシュ最高！！

辻沙代子

今バングラでの日々を振り返ってみるとすごくキラキラしている。しかし、あの場にいたのがうそのようには感じない。それは、きっと私にとってあの日々は大変学び多かったからだろう。だから私はバングラにいた私自身を誇りに思う。中身の濃い時間を過ごせたことを私に関わった全てのの人に感謝している。

バングラで学んだこと。まず、教育の必要性。子供は教育を通じて知識を増やし、目標を作ることが出来る。教えてくれる人がいるから本当の思いやる心を知ることが出来る。子供の教育は大人になっても残る基本となるものだった。その他に幸福の尺度は心の豊さで変わるものなのか。それとも、みんな同じで満足できるかできないかの問題なのかとも思った。知ることの厳しさ。現実を受け止める準備ができていなかった。ニューマーケットの恵みを求める人々。親元を離れ、めいどとして働く小さな女の子、物乞いをしてくる少年達、小さな赤ちゃんの面倒を見る小さなお兄ちゃん。たくさんの人の日常を垣間見た。蘇る日本での自分の生活。私達になにができるのか。混乱した。そしてその答えはまだ見つけることができていない。

ファルークさんが言った「お金を稼ぐ機会が日本にはたくさんある。しかし、時間を楽しむ、お互いを知る時間を持たない日本人」という言葉。お互いを知ることとは語り合うことだと思った。なぜなら私はこのツアーの人たちとたくさん語り合って大切な仲間となれたから。

発展について私は興味をもった。ネトロコナは大変自然がすばらしく素敵だった。人々が生きることを楽しんでいて、家族の結束も固くお互いを知ることでもできている。日本が発展の為に捨ててきた大切なものを彼らは持っている。大切なものをなくさずに国を発展させる方法はないのだろうか？ファルークさんは発展を支える人たちの意識がよい方向に向う事が大切。そのためには教育が大切。村民一人一人に Practice of love (愛の実践) を求めると言った。相手を思いやる心、相手を大切に作る心、そういう小さな一つずつが practice of love である。ファルークさんは最後にこんなメッセージをのこした。Live long, happy, strong。切実に、幸福に、強くいきなさい。本当にファルークさんの言葉は一つ一つが重かった。

バングラの星はとてもきれいだった。東京でみるオリオン座を見て私は同じ時の中にいる事に気づかされた。地球は半日で日本の裏側まで行ける程狭くなった。しかし、たくさんの文化、生活、生きモノが詰まった大きく重い星だと思った。私も、バングラで出会った人々も、今戦火の下で必死に生きているイラクの人も、世界の富の半分以上を占めるアメリカ人も同じ地球人でみんな同じだと思った。その中で貧富の差、戦争が起こるのはおかしいことだと思う。みんな同じなのに……。がんばろう！！地球人！！！！

生き方を変える出会い

井上儀子

第24回 ACEF スタディーツアーに出発する1週間前、ACEF 会長隅谷三喜男先生が天に召されました。密葬の司式をされた船戸良隆牧師は、礼拝の中で次のように話されました。「もし天国で隅谷先生にお会いすることができたら、先生は何とおっしゃるだろう。『船戸君、君はあれからどのように生きたかね？苦しむ者と共に苦しみ、悲しむ者と共に悲しむ生き方をしたかね？』……」人と出会うということは、その出会いを通して私たちの生き方が変えられていくこと、また、その後の生き方が問われることであると、気づかされました。このことが、今回のスタディーツアーの間ずっと私の頭の中を駆けめぐっていました。

私は11年前、バングラデシュに出会い、それまで想像もしなかった世界を見て生き方が変えられました。あれから毎年バングラデシュを訪れ、小さな出会いをたくさん積み重ね、その度に生き方が問われてきました。誰もが戸惑う物乞いの子どもたち、人々との出会い、それとは対照的に、学校で目をきらきら輝かせながら学ぶ喜びをからだいっぱい表す子どもたちとの出会い、言葉がわからなくても精一杯の親切を与えてくれる人々との出会い、心動かされる出会いはたくさんありました。

今回は悲しく辛い出会いがありました。1992年に初めて出会った少年はBDPの寺子屋学校の生徒でした。毎日宿舎に遊びにきてはいたずらをしたり、名前を呼び合ってはふざけたりしていました。小学校を卒業し、しばらくしてBDPの職業訓練学校も卒業したのですが、思春期の情緒不安定から母親との口論が度重なり、突然彼は死を選んでしまいました。死ぬ前に彼は自分の写真をすべて焼いてしまったので、写真がほしいと人づてに聞き、私は彼の写真を額に入れて大切に持っていました。彼の母親に会うのは2回目でした。前回は「まあ、あなたがお母さんなの？彼は小さい頃ね……」と大笑いしながら話し合ったのに、今回は会うなり言葉が出ず、抱き合ったまま号泣してしまいました。でも、思い切り泣いた後、私は冷静になれました。私も同じような年頃の2人の息子の母親で立場は似ているけれど、境遇は違うのでよく話を聞こうと彼女の前に座りました。こちらからは質問はせず、話されることだけを相づちをうちながら聞きました。薄暗くなる前に帰ったほうがいいとの助言にも耳を貸さず、真っ暗になってもまだ彼女は腰を上げたくない様子でした。「人生には辛いことがいっぱいあるわ。」この私の言葉は彼女には空しく響いたことでしょう。でもいつまでも帰ろうとしなかった姿に私は少し救われた気がしました。散々迷ったけれども、写真を持っていったことは間違いではなかったのです。私も彼の母親の辛さを身体で感じ、それでも生きていかねばならない道を前にして、よりよく生きていこうと誓いました。

第24回ACEFスタディーツアーメンバー(2003春)

◎ジャマルプールチーム

Aチーム	木部 尚志	キベ' ヲシ	ICU助教授
	今野 誠子	イマノトモコ	青山女子短大児童教育学科2年
	榎本 悠希	エノモト ユウキ	ICU国際関係学科2年
	黒沢 貴子	クロサワ タカコ	東京女子大日本文学科2年
Cチーム	福田 佳也	フクダ ヨシヤ	私立学校事務職
	中野 紗也香	ナカノ サヤカ	青山女子短大国文学科1年
	橋本 有華	ハシモト ユカ	日本リハビリテーション専門学校
	和田 耕一郎	ワダ コウイチロウ	ICU理学科4年

◎ネトロコナチーム

Bチーム	黒岩 裕	クロイワ ユタカ	青山学院女子短大助教授
	千品 真美	チシナ マミ	東京女子大地域文化学科1年
	辻 沙代子	ツジ サヨコ	青山女子短大家政科2年
	米田 辰也	ヨネタ タツヤ	ICU教育学科3年
	井上 儀子	イノウエ ノリコ	ACEF事務局

<メンバー紹介！！>

・堂々今ツアー最年長福ちゃん！！シェアリングの発言では福ちゃんの経験の豊かさ、思慮深さをみせつけられた。時間の使い方が上手で即熟睡。タイ空港での七時間待ち、結局荷物当番を全てパスし昏々と寝ていらした。(向かって左)

・たかちゃんは、とってもキュートで誰からも好かれる、ツアーメンバーのアイドル的な存在です。また彼女はとても感受性豊かな人で実際彼女がツアー先で詠んだ短歌にとっても感銘を受けました。(中央)

・木部先生は、正に本当の意味で先生と呼べる方だ。俺は先生の立ち振る舞いや仰られた事から、これからの人生において、どのように物事を知って行けば良いか学んだ。先生にはいくら感謝しても、足りる事は無い様に思う。(向かって右)



(中央)

・悠希は体格だけでなく、人間的にもすごくおっけい奴だ。そんな悠希だからこそ、スタッフや村の子どもたちからも一番人気だったんじゃないかな？ 誰からも愛されるのは、きっと誰をも愛そうとしているからなんだね。(向かって右)

・のりちゃんはパワフルで、寒い発言が大好きで、そして何よりバングラが大大大好きな女性です。寒い発言のあとに皆になだめられてるのりちゃんをみていつも「もうっ、かわいいなあっ！」って思っていました。大好きです。(向かって左)

・米ちゃんは本当に「いいやつ」という言葉がぴったり。さりげなく人を気遣い、黙々と働き、発言はいつも理路整然。基本的に賢いのだろう。満員バスの中で米ちゃんの足元に座り込んで寝てしまった女の子を、3時間ずっと気にかけていた優しさを忘れない。(向かって左)

・第一印象は真面目そうで話しくそうだった。しかし仲良くなれば耕ちゃんのヤンチャさはみんなを和ませていつも笑いの中心！そんな一面もありながら実はすごくしっかりして頼りがいがあるって私は気付くと耕ちゃんのそばにいてあなたに頼りっぱなしでした。



Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。



会員募集

個人会員	年額 1 口	5,000 円
団体会員	年額 1 口	50,000 円
学生会員	年額 1 口	2,000 円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替 00100-0-185540
アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@rg7.so-net.ne.jp

<http://www.bluerain.fm/acef>